

都市コルドバの起源とローマ化 —ローマ帝国先住民研究に向けて—

宮崎 麻子*

はじめに：イベリア半島とローマ帝国

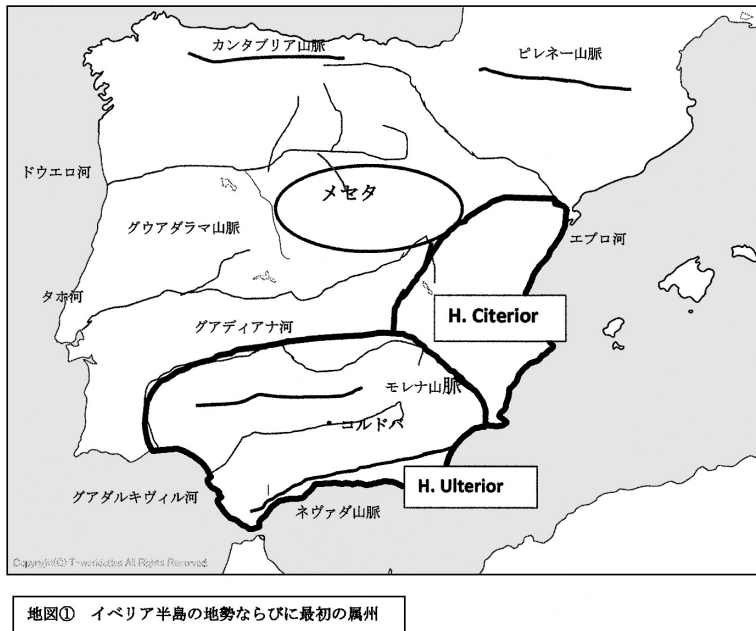
イベリア半島の文化的多様性、という言葉を目にすると、おそらく誰もが想起するのはイスラーム文化とヨーロッパ文化との接触と混淆ではないだろうか。しかし、イスラーム勢力が進出するよりはるか前、古代期からこの半島の文化は多様な諸要素の融合の所産であった。その当事者でありかつ触媒としての役割を果たしたのが、ローマ帝国である。

ローマは第二次ポエニ戦争（前218～202）中にイベリア半島に進攻し、この地のカルタゴ勢力を駆逐した。前197年には、半島に二つの属州、「こちら側のヒスパニア ヒスパニア キテリオル Hispania Citerior」と「あちら側のヒスパニア ヒスパニア ウルテリオル H. Ulterior」を建設した。（地図①）

ローマの進出以前にも、すでに半島内には多様な人的集団の勢力圏があった。半島南部には、前8世紀頃グアダルクビル河中・下流域にタルテッソス王国があり、豊富な鉱山資源（金、銀、銅、鉛、水銀等）を生産、加工し、交易で繁栄したと伝えられる。南部は地中海に向いて長い海岸線があるため、ギリシア人、フェニキア人、カルタゴ人らの到来があった。特にフェニキア人は8世紀頃以降、タルテッソスやその他の諸地域と交易しつつ一部は沿岸部に定住し、在地住民へ文化的影響を幅広く残した。こうした過程を経て、ローマ進出直前の半島南部の人々は、前4世紀頃までに一定の文化的共通性を持ったと考えられている。この人々は一般にイベリア人と呼ばれる。

他方、北東部を中心とする一帯では、ピレネー以東との共通性を持ったケルトイベリア文化の広がりが知られ、この文化圏に属する人々はケルトイベリア人と呼ばれる。また、西部のルシタニア人と総称される人々は、しばしば南部地域を略奪したと伝えられる。その他にも、諸地域の多様な集団の痕跡が、文献史料および考古学的知見から知られているが、それらの性格も、相互の関係も明らかでない面が多い。しかしわかる限りで言えば、ローマが進出する以前のイベリア半島に存在した人的諸集団は一定程度、相互の接触と文化的融合がありながらも、本質的にはそれぞれが多様で固有の特質を備えた文化世界を形成していたと考えられる¹。このような「小世界」によって構成されていた半

* 人間科学総合研究所客員研究員



地図④ イベリア半島の地勢ならびに最初の属州

島は、ローマ帝国に組み込まれて以降は、少なくとも政治的・制度的にはヒスパニアという一つの世界として統合され、これら小世界に生きた人々は属州民という立場に統合されていく。

こうした過程を踏まえ本稿では、帝国による政治・制度面での統合の中で、分立する小世界自体がいかにして文化的に融合したのか、という問いをたてたい。これはすでに研究蓄積がある問いだが、しかし未だに見解の一致は見られない。制度的一体性の中で、これら小世界に生きる人々は、自己のアイデンティティの前提であるはずの文化的固有性を捨てて、法制度的のみならず文化的にも属州民という一つの世界の成員へ融合していったのか。融合があったならば、それは具体的にはどのような面で、どのように進行したのか。あるいはそのような文化的統合と融合は起こらなかったのか。起こらなかった場合、先住民は帝国の属州民としての法的立場と自らの文化的アイデンティティをいかに整合させたのか。ローマ帝国下において被支配者として生きる人々の帝国への統合のあり方について、一つの指標をもたらすであろうこれらの問いは、今後具体的なレベルで検討されねばならない。

実はローマがイベリア半島に進出してきた時点では、まだこの国は帝国と呼べる存在ではなかった。第一次ポエニ戦争（前264～241年）での勝利の後に、ローマが得たシキリアおよびコルシカ・サルディーニアは属州と呼ばれるが、後に知られる属州統治は未だ確立していなかった。ローマの対外支配体制は本質的にイタリア内部に向けられたものであった。そしてこの段階でのイタリア支配は、基本的に都市国家間の同盟関係に基づいている。ローマの国家体制も、都市国家的本質を留めたままであった。

そのローマが、統治の単位である属州の統治を初めて確立したのが、イベリア半島であった。それは、支配者であるローマ人にとって初めての経験であったが、被支配者の立場に置かれた人々にとっ

でもまたそうであった。帝国形成という未知の過程において、帝国の被支配者は支配者といかに向き合い、また自らをいかなる立場に置き直したのか（または置き直さなかったのか）。「帝国の民」として、属州民が自らを帝国社会にいかなるかたちで統合させていったのかということをも明らかにするという、遠大な目標を視野に置きつつ、本稿はそのための問題整理と、方法論を提示するという予備作業を行う²。

1. ローマ化概念と帝国形成史

ローマ帝国内属州における先住民文化のローマ文化への統合は、伝統的に「ローマ化」という概念で説明されてきた。この概念をめぐるのは、この30年ほどの間に厳しい議論があり、その決着は未だについていない。ローマ化を主題とする研究の中でカーティンがとりまとめた論点整理に従うと、問題は大きく二つとなる。まず、ローマ化概念が培われた19世紀当初、ローマ文化の他文化に対する優越性が自明のものとされ、ローマ帝国の与える被支配地域（換言すれば文化的後進地域）への恩恵としてのローマ化の実相・程度を帝国各地に当てはめて評価しようとしたという点である。こうした認識が、ポスト・コロニアル時代の歴史学研究においてもはや受け入れがたいことは言うまでもない。

第二の問題点は、「ローマ化」概念の前提となるはずの「ローマ文化」、「先住文化」といった概念、ないしそれらの基底となる「ローマ人」「先住民」といった概念自体を截然と規定することができず、従って両者の間の線引きもできないということである。当然、時間的推移の中で截然と「ローマ化前」と「ローマ化以後」といった線引きもできない³。

こうした問題を踏まえて、近年「ローマ化」概念はローマ帝国史研究においても有効と見なされない傾向にあった。にもかかわらず本稿では敢えてこの語を用いつつ、イベリア半島先住民のローマ帝国への統合の実状を探ることとしたい。その理由を、属州設置後のローマと先住民との関係の変遷を概観しつつ述べておこう。

イベリア半島に進出した時点のローマは、新たに支配下に置いた空間と人を統治するノウハウも持たず、また異文化世界との本格的な接触もない状態であった。ヒスパニア二属州の設置以降、ローマは、というよりも現地には派遣された政務官は当初、なんらの制度的裏付けもないままに各々が管轄する支配地の統治方法を模索していたようである。まさにそれと同じ時期から、ローマと半島先住民との間には戦いの連鎖が生じた。個々の戦いの原因は多様である。というよりも、史料上の制約からほとんどの戦いの原因はわからないと言うべきであろう。しかし、たとえば前2世紀中葉最大の戦いであるケルトイベリア戦争の発端について、史料は次のように語っている。

ケルトイベリア人のティティ族の、大きく強力な町セゲダは、グラックスの条約に従っていたが、他のもっと小さな町々に対して自分たちの境界を定め、周囲に壁を建設するように説得した。セゲダは近隣の部族ベリイ族にも同じことを求めた。元老院はこのことを知ると、囲壁の建設を禁じた上

で、グラックスの条約で定められているという理由に基づいて貢納を払うことを要求し、またローマ軍のために部隊を供出することを命じた。セゲダは、壁に関してはグラックスの条約は新しい町を建設することを禁じていても、既存の町に囲壁を建設することは禁じておらず、また貢納と人員の供出については、後にローマ人自身がこれを免じたのだと応えた。それは事実であった。しかし元老院は、こうした免除を認める際に、常にローマ人の好意を得られる限りは、と付け加えていたのだった⁴。

このやりとりの後、前154年にケルトイベリア人は蜂起した。

グラックスの条約とは、前179/8年に属州ヒスパニア・キテリオルを管轄したティベリウス・センプロニウス・グラックス *Ti. Sempronius Gracchus* が、先住民ととり交わしたと伝えられるものである。アッピアノスはこの時点のグラックスの行動を次のように伝える。

それから（筆者註：ケルトイベリア諸部族を制圧した後で）、彼は貧しい者たちに土地を分配し、彼らを定住させた。そしてすべての部族と念入りな取り決めを結んだ。彼らをローマ人の友とし、それを実現するために誓約を交わした⁵。

グラックスは、ケルトイベリア人と戦って勝ち、多くを殺戮した。しかしその後は、ケルトイベリア人との間に対等の関係を約束し、彼らの生活に便宜を計らったというのである。また、前154年に関する記事は、グラックスがケルトイベリア人が既存の居住地に、おそらくは防衛設備の新設まで含めて自律性を認めていたことを示唆している。彼の条約は他の地域の先住民にも適用されたということを示唆する史料もある⁶。実際、前2世紀中葉以降に激化する戦いの中で、グラックスの条約は先住民側とローマ側との交渉の際に基準となるものと見なされた。前154年のセゲダの態度を単純に解釈することはできない。しかし、仮にポーズが含まれていたとしても、前2世紀中葉の段階でも依然として先住民が伝統的居住形態の維持を重要視し、またローマ側の求める被支配者としての態度を示すことも拒んだことの意味は看過できない。この時点でも依然として、彼らはローマから政治的にも文化的にも自立していることを表明し、ローマに戦いを挑んだのである。

ケルトイベリア戦争を含む先住民とローマとの戦いは60年以上にわたって、各地で断続的に続いた。そして前133年に、先住民の拠点ヌマンティアが8ヶ月の攻囲に苦しめられた末、ローマに無条件降伏したにもかかわらず、ローマ軍の司令官小スキピオによって徹底的に破壊されるという結末に至った。これ以降も、半島北部および西部の地域住民とローマ軍との間の戦いがなくなったわけではない。しかし、明らかに前2世紀末以降のヒスパニア統治は、それ以前に比較して安定している。この段階までに、つまりまさに戦いの連鎖の時期に、属州ヒスパニアの統治体制は一定程度の確立をみた、と考えることができよう。ただし、それが具体的にいかなるものであったのかを、史料は伝えてはいない⁷。

特にバエティス河（筆者註：グアダルキヴィル河）流域に暮らすトゥルデタニイ人は、ローマ風の生活をあまりにも全面的に受け入れてしまったために、もはや自分たちの言語を忘れてしまった・・・中略・・・こうしたイベリア人たちは、その生活様式のゆえに *togati*（筆者註：「トガを着る人」の意。トガはローマ人に固有の衣服である）である¹³。

（筆者補足：属州総督の副官のうち）3人目は内陸部を監督し、*togati* が住んでいる都市を治めた。彼らは平和を愛する人々と見なされてきたし、イタリアの洗練された生活様式—トガのような—を受容していた。彼らは海岸線まで至るイベル河（筆者註：エプロ河）の両岸に住むケルトイベリア人である¹⁴。

この記述が正しいなら、属州バエティカのイベリア人と、属州ヒスパニア・キテリオル東部のケルトイベリア人は、すでにストラボンが生きた元首政最初期にローマ風の生活様式に全面的に染まっていたことになる。

ヒスパニアの発展はまた、帝国全土に影響をおよぼした。すでに紀元1世紀にはヒスパニア出身の元老院議員が輩出され、著名な文人も輩出した。2世紀にはヒスパニア出身の皇帝が生まれた¹⁵。

このように元首政期の状況を概観してみると、そこには「帝国の優等生」とも呼べそうな姿が現れる。こうした姿自体が果たして実態をどれほど反映しているのかということ、検討せねばならないとしても、全体としては元首政期のヒスパニアでは、ローマから与えられた法的権利を持ち、ローマ型の都市でローマ型の政治を行ったばかりでなく、その都市景観をローマ風なものとし、「ローマ人の生活様式を受容し」た人々が広くあった。つまりは、政治・制度に留まらず、経済活動、社会、生活様式、美意識等の文化面全般に当時のローマやイタリアに共通する特徴が見出されると言えよう。すると、その状態に至るプロセスを全体として表現するに、結局のところ「ローマ化」以上に有効な語は見当たらないのではあるまいか。この単純な考え方に基づいて、本稿では先住民のローマ帝国への統合の広がりや深化の程度を、「ローマ化」という語を用いて検証することを目指したい。

さて、すでに見たように、統治体制自体は前2世紀の間によく一定程度の確立をみたと考えられる。すると、元首政期に見出される「ローマ化」はその後、つまり前2世紀末以降に進展したのであろうことは疑いない。ではそれは、前2世紀末頃からアウグストゥス期までの約100年の間のいつ頃に進展したのであろうか。ほぼ同じペースで進行したのか、あるいはある特定の時期に顕著に変化が生じたのであろうか。後者であるとすれば、それはアウグストゥス期である可能性が最も大きい。すでに見たように、アウグストゥスは半島の北部・西部を制圧して、属州の再編を行っているからである。その際に、属州ルシタニアの州都エメリタ・アウグスタ *Emerita Augusta*（現メリダ）をはじめとする植民市の建設や自治市、ラテン権市の認可を行ったことが知られている¹⁶。そうであるならば、ヒスパニアの「ローマ化」は元首のイニシアティヴによる側面が大きかったのであろうか。それとも、そこには他の要因があったのであろうか。こうした問いを含みつつ、本稿で扱う時間幅は、およ

その前2世紀末頃からアウグストゥス期までとなる。

ところで、ここまで属州設置後のイベリア半島について総体的に先住民に言及してきた。しかし実際の検討においては、対象をそれぞれの人的集団について、しかも特定の場所に絞って状況を見る必要があることは言うまでもない。本稿ではさしあたって、半島南部の都市コルドバ（ローマ名コルドゥバ。元首政期のコロニア・パトリキア *Colonia Patricia*）を検討の対象としたい。後に詳しく見るように、コルドゥバは起源的には先住民の居住地であったが、おそらく前2世紀半ばという早い時期にローマの居住地が置かれた。また遅くともアウグストゥス期には植民市となり、属州バエティカの中心都市と位置づけられた。考古学の知見によれば、すでに前2世紀末以降に当時のローマとイタリアで用いられた建築様式や装飾が導入されている¹⁷。これに加え、最近では隣接する属州ルシタニアの中心都市エメリタ・アウグスタ *Emerita Augusta*（現メリダ）との関係の可能性を取り上げて、両者が元首政期ローマのイベリア半島統治体制推進を担っていたのではないかという見解も提示されている¹⁸。こうした諸側面からみて、コルドゥバにおけるローマ化の実態を明らかにすることで、イベリア半島におけるローマ化の深度と広がりを探るための最初の手がかりを見出すことができると考えられる。

さて、ローマ化する語を用いてコルドゥバの状況を検討するのであれば、上で確認したところの、概念としてのローマ化に関する批判を看過すべきではない。その第一の点については、コルドゥバにおけるローマ化の主体とその動機が（その多様さも含めて）、慎重に問われねばなるまい。その際、本稿の主題に従って、そこで先住民（属州民）の立場が中心的な検討の対象となることは言うまでもない。

第二の問題点は、より大きな困難を伴う。元首政期と異なって、共和政末期は未だにローマ帝国の支配域も「ローマ人」の範囲も限定的である。その一方で、この時代に「ローマ文化」なるものがどこまで載然と規定できるかという点、疑わしいと言わざるをえない。ローマ世界は（他の世界と同じく）常に周囲の世界と接触し、相互に文化的影響を与えあいながら自らの文化を形成したことは言うまでもないが、就中まさにこの時期、帝国化するこの国は多様な文化圏との（特にギリシア的世界との）接触を通して変容しつつあったからである¹⁹。結局のところ、作業はカーティンに倣って、「帝国のあまり辺境でない地域においては既に定着しており、人的な要因によってそれら地域から伝播される、モノと振舞いの諸形態²⁰」を探ることにならざるをえないのだが、それは具体的には都市コルドバの景観と生活の中からどのように抽出しうるのかという点を検討していく必要がある。

以上を取りまとめると、今後の作業は前2世紀末からアウグストゥス期にかけての時期に、ローマとイタリア周辺において一般的に定着していたモノや振舞いのうちの何が、どの程度、どのような形でコルドゥバにおいて見出されるのか、そしてそれは誰が、いかなる経緯で、何のためにこの場所に持ち込み、定着させたのかということを見定めるといことになる。

この、藁山の中から針を拾い出すような作業に取り組む前にしかし、まず行わねばならないのは、当該時期におけるコルドゥバの居住者とはいいかなる人々であったのかという点を明らかにすること

である。すなわち元首政期には植民市として特権を備え、属州バエティカの州都と位置づけられ、セネカやルカヌスを生んだこの都市は、そもそもいかなる起源を持っていたのか。本稿の後半で行う作業はその点を明示することとなる。

なお、ここまでの記述の中で、都市ないし居住地といった語を用いてきた。古代西洋世界の他の場所と同じくイベリア半島においても、人間の居住する空間には規模、景観、社会構造、法的地位などの差がある。その中で何を都市と呼び、なにを他の名で呼ぶかという問題は容易には定められない。ギリシア人とローマ人の文献史料では、しばしば *civitas*、*urbs*、*oppidum* また *polis* といった語が、厳密な使い分けのないままに現れる。しかしこれらをすべて「都市」と表現すれば、差違が全く見えないことは言うまでもない。本稿では以下、ローマ帝国からなんらかの市民権を得た居住地のみ「都市」と呼ぶこととする。これに対して、ローマの進出以前に先住民が住んでいた空間を「先住民居住地」と、そしてローマ人が建設した、ないしは先住民居住地であったものをローマ人が改変したものを「ローマの居住地」と呼ぶこととする。こうした表現には、後に見るように実態との乖離が含まれ、また個々の居住地の規模、景観、社会構造そして歴史的背景の違いが覆い隠されてしまうが、それらについては適宜言及するとして、本稿ではあくまでも便宜的にこうした使い分けをとることとしたい。

2. コルドゥバのローマ化

(1) 先住民居住地コルドゥバ

前2世紀中葉に、ヒスパニアを管轄した政務官マルクス・クラウディウス・マルケルス *M. Claudius Marcellus* がコルドゥバを建設したと、史料は伝える²¹。しかしそれ以前から、すでに先住民居住地としてコルドゥバは存在していた。その実態は、考古学調査の知見に依拠するほかない。

現コルドゥバ市南西部には前2000年紀以降にいくつかの居住地が形成された痕跡があるが、ローマ進出直前のそれは前8世紀頃に確立したようである²²。ストラボンによれば、グアダルキヴィル河中・下流域はトゥルデタニイ人の勢力圏であり、彼の生きた時期には200もの都市や居住地があったという。コルドゥバはそのひとつに挙げられている²³。また、居住地名の *Cord-*という要素が *Turd-*の古い形態であり、「トゥルデタニイ人の町」という意が読み取れるという説もある²⁴。トゥルデタニイ人はかつてのタルテッソス王国の末裔であり、文明的で平和的な性格を持ち、農業と鉱山資源の交易で繁栄したと伝えられている²⁵。本稿冒頭で述べたように、タルテッソス王国が前8世紀頃に繁栄したことと、先住民居住地コルドゥバの変化の時期とを合わせて考えると、史料のこの説明は説得力があるようにも見える。

しかし、トゥルデタニイ人と呼ばれる集団の定義については、疑いが提示されつつある。その要点を述べると、まず古代の作家たちがトゥルデタニイ人と呼ぶ人々は、その時々の文脈によって近隣の多様な人的集団と部分的に重なる、あるいは場合によってはそれらを包摂している可能性があることが指摘されている²⁶。これに加え、前4世紀頃以降はケルト人の、そしてローマ進出直前の前3世紀

後半にはカルタゴ人の定着があり、こうした人々との文化的混淆も看過できないとも言われる²⁷。

つまり、ローマ進出以前の先住民居住地コルドゥバについては、単純にトゥルデタニイ人なる、この地域に一元的な文化圏を形成していた集団がその住民であったとは確言しがたい。この居住地の住民は、ローマ進出以前にすでに多様な文化的要素を備えた人々であった可能性も残る。

居住地は、グアダルキヴィル河の川岸から10mほど高い場所に、約50ヘクタールほどの面積を備えていた²⁸。元首政初期の属州バエティカで面積が確認できる（市民権を持つ都市とローマ的居住地双方を含む）38のローマ型都市のうち、50ヘクタール以上の面積を持つものはコルドゥバ自体を含めて6つしかない²⁹。比してこの先住民居住地の規模の大きさは特筆に値するであろう。人口は確定できない。しかしこの地域における前4世紀頃の先住民居住地にはほとんどの場合、公共空間も大型公共建造物も備わっていない点を踏まえると、2階建て住居が主流であったことを考慮しても、かなりの人口があっても不思議ではあるまい³⁰。

居位調査が中心であるので、この居住地の全体像を把握することは現状では難しいが、建材と考えられる日干し煉瓦と壁土が発見されている。また建造物基部には泥と石が用いられたようである。屋根瓦が発見されていないので、屋根は木材、枝、泥などで葺かれていたと考えられる。他方、鉾の発見が金属加工技術の定着を示唆している³¹。

居住地の周辺には耕作地があった。上で示した史料の言及とも併せて、農業が住民の経済活動の大きな要素であったことは疑いない。一方、居住地跡からは、前5世紀から4世紀にかけての時期に属する大量のアッティカ産陶器が出土しており、この時期までには、おそらく海外との交易が相当規模に行われていたことが見てとれる。この地域の先住民居住地は、一般に高台に位置する傾向があり、河岸というコルドゥバの位置は例外的と言えよう。また、これら輸入陶器と並んで、在地産の彩色土器の破片も多数出土していることを併せて、コルドゥバは後背地の農産物と手工業製品、そして山岳地域の鉾山資源を取り扱う、交易ハブとしての役割を果たしていたと考えられている³²。

これに加え、カンパニアA、カンパニアB陶器の破片も大量に出土している。これらのイタリア産陶器の輸出が本格化したのが前2世紀以降だという説に依拠するならば、ローマ人の進出以降もしばらくの間、この居住地は交易地としての機能を果たしていたという可能性が考えられる³³。

続いて、ローマ的居住地コルドゥバが建設される経緯を見てみよう。

(2) 前2世紀のローマ的居住地建設

前2世紀にマルケルスが、ローマ的居住地コルドゥバを建設したことは述べた。しかしその年代を特定することは難しい。マルケルスは前2世紀前半に二度、属州ヒスパニアを管轄しているからである。一度目は、前169/168年に法務官ならびに法務官格として両属州における、二度目は前152年に執政官としてのキテリオルにおける政務であった。史料は詳細を語らないので、どちらの時点でコルドゥバが建設されたのか決定することはできない³⁴。

より重要であるのは、前2世紀の戦いの連鎖の中で、マルケルスのみならず数人のローマ人司令官

たちが半島へ居住地を建設していたという事実である。最も古い例として、すでに前206年の大スキピオによるイタリカ建設がある。第二次ポエニ戦争中のこの時、ローマ軍の司令官であった大スキピオは、イタリア出身の傷病兵のためにこの居住地を建設した³⁵。また前189年に、ルシタニアにあったルキウス・アエミリウス・パウルス L. Aemilius Paullus の命令を記載した碑文に、居住地建設が挙げられているという説がある³⁶。次いで前178年に、前述のグラックスがエプロ河上流にグラックリス Gracchuris を建設した。グラックスは同じ時期にグアダルキヴィル河岸にもう一つの居住地イリトゥルギ Ilturgi を建設したと伝える碑文があるが、これについては疑いが残る³⁷。前171年には、元老院議決によりラテン権植民市カルテシアが建設された³⁸。時期が下って前139年の執政官ルキウス・セリウィリウス・カエピオ L. Servilius Caepio³⁹ がルシタニア人のために居住地を、デキウス・ユニウス・ブルトゥス D. Iunius Brutus⁴⁰ がヴァレンティア（現ヴァレンシア）を建設した。前169/8年であれ前152年であれ、マルケルスによるコルドゥバ建設は、カルテシア建設と前139年の間に位置することになる。

これら7人の、最大で8件、最少で6件の居住地建設には、ほとんどすべてに共通する性格が見出される。第一に、これらはすべて現地の司令官が建設したという点である。より正確には、元老院のイニシアティヴが一カルテシアというただ一つの例外を除いては—そこには見られない。第二に、これらの建設の主眼は、ローマ市民の居住ではなかった。前述したように、イタリカはイタリア人のために建設されたと伝えられる。パウルの命令が居住地建設を意味しているとすれば、彼はルシタニア人の一部へ居住地を提供したことになる。グラックスが、ケルトイベリア人の貧民のためにグラックリスを建設したという記述は、前に引用したとおりである。カルテシア住民はローマ軍兵士と先住民との間の子の子孫であり、元老院は彼らの都市にラテン権を認めた。カエピオはルシタニア人のリーダーにしてローマの強敵ウィリアトゥスを暗殺した後に、残されたルシタニア人たちのために居住地を与えたという。ブルトゥスもまた自らが打ち破ったルシタニア人に居住地を与えた。コルドゥバのみ、ストラボンが「最初からローマ人と先住民の中から選ばれた者が定住した。」と述べていることから、建設当初からローマ人の居住が想定されていたことがわかる⁴¹。他のローマ的居住地に関しては、建設当初の前2世紀にローマ市民が実際に居住していたかどうかすらわからない。

第三点を挙げよう。これらの前2世紀のローマ的居住地を建設した司令官たちは、理由、具体的な敵、規模などには差があれ、半島先住民と戦ったことが知られる者ばかりである。特にグラックス、パウルス、カエピオ、ブルトゥスは上で述べたとおり、直接戦った敵のために居住地を提供したと伝えられる。

このように、この時期のローマ的居住地建設は、属州統治政策の一環として元老院のイニシアティヴで行われたものではなく、現地で先住民と戦った司令官たちによる戦後処理という性格のものであった。そこでは、ローマ市民の定住地や、まして植民市の建設は目指されていなかった。唯一カルテシアのみがラテン権植民市の地位を与えられたが、その理由は上で述べたとおり特殊なものであった。

実際、ローマの居住地といってもローマ市民の居住が確認できない一方で、これらの居住地からは各地で在産の陶器などが多数出土している。他方、この時期のローマで知られる類いの公共空間、公共建造物また行政組織は確認できない⁴²。その意味で、これらはむしろ先住民の生活の場という性格を備えていたとみることができそうである。

おそらく前2世紀のローマの居住地は原則的に、現地で先住民と戦った政務官が、敵対的な先住民を懐柔するため（グラックリス、ウァレンティアならびにパウルス、カエピオの居住地）か、あるいは彼らを監視するために（おそらくイタリカ）、つまりは戦略的な目的を主眼として建設したものであった。

マルケルスがコルドゥバを建設した時点の事情について、史料は何も語らない。前152年にはケルトイベリア戦争、ルシタニア戦争という二つの大規模な戦いにローマは苦しめられているが、南部イベリア人がローマに離反したという記録は皆無である。前169/8年の時点での状況はよくわからないが、従って後者の方が蓋然性が高いかもしれない。次にローマの居住地コルドゥバ建設後の状況を見ておこう。

(3) ローマの居住地コルドゥバ

ローマの居住地コルドゥバの建設を述べるストラボンの言葉を改めて挙げておく。

この町には、最初からローマ人と先住民の中から選ばれた人々が定住した。そしてこの地域にローマ人が最初に用意した居住地であった（ὠκισάν τε ἐξ ἀρχῆς Ρωμαίων τε καὶ τῶν ἐπιχωρίων ἄνδρες ἐπίλентοι : καὶ δὴ καὶ πρώτην ἀποικίαν ταύτην εἰς τοὺςδε τοὺς τόπους ἔστειλαν Ρωμαῖοι.)⁴³

マルケルスは新しいコルドゥバを先住民居住地コルドゥバの約100m北東に建設した。この部分は先住民居住地よりも約10m高い位置となっている。早い段階で、囲壁が造られた。この囲壁は石灰岩の切石積みで厚さは1, 5m以上、要所に方形ないし円形の見張り塔が設けられていた。囲壁の内側は6mの土塁で補強されており、外側は東西および南側は高低差約15mの急な自然勾配、唯一傾斜のない北側のみ深い壕が設けられていた⁴⁴。

この位置と強固な造りから、最初期のローマの居住地コルドゥバが軍事的な性格を強く備えていたことがうかがわれる。おそらく先住民居住地コルドゥバを監視することが、目的だったのであろう。

面積は約42ヘクタールという大規模なものであった。初期段階からローマ都市に特徴的な構造—囲壁、ほぼ東西南北に直行する道路、とりわけ南北の主幹道路カルド・マクシムス *cardo maximus* および東西の主幹道路カルド・デクマヌス *cardo decumanus*—そして公共広場フォルム *forum*—は備わっていた。しかし出土品から推測される建造物は木材、土壁、日干し煉瓦作りであり、瓦は出土していない。道路は舗装されておらず、水道はない。つまり、上で確認した先住民居住地と同じ水準の住環境であった⁴⁵。

高台に位置している分、このローマ的居住地はグアダルキヴィル河岸からやや離れていた。河に最も近い市門から河岸まで、約420mの距離がある。にもかかわらず、前2世紀に属する層位からは、大量のイタリア産陶器（カンパニアA、Bを含む）、大型アンフォラ（Dressel 1A）、ランプ、食器などが出土している。また量は少ないが在地産彩色陶器も発見されている。すでに早い時期にローマ的居住地コルドゥバが交易に依拠していたことが窺われる⁴⁶。

最初期から備わっているローマ型都市の構造から、マルケルスがこの居住地をローマ都市として建設したとも思われる。実際コルドゥバが最初から植民市であったと考える研究者もいる⁴⁷。その根拠として取り上げられるのが、ストラボンのἀποικίαなる表現であるが、フィアーの主張するように、この語を「植民市 colonia」と理解するに足る証拠はない。前2世紀中葉という時期に、カルテア以外のローマ的居住地は、明らかにイタリア人のために建設されたと伝えられるイタリカですら植民市ではないこと、またここまで見てきたとおり、コルドゥバが軍事目的で（おそらくは先住民の監視目的で）建設されたであろうことを考慮すると、元老院が植民市建設を承認したとも、マルケルスがそれを目指していたとも考えにくい。前2世紀のコルドゥバは、なんらの特権も与えられない居住地であったと見なすべきであろう。

とはいえ、このことはコルドゥバにローマ市民が初期から居住していたことを否定するものではない。クナップは、ストラボンの述べる「ローマ人」の内実はイタリア人や混血の人々、解放奴隷すら含まれる可能性があると述べるが⁴⁸、ストラボンの表現を敢えて拡大解釈すべき理由は見当たらない。「ローマ人」がローマ市民だと考えると、戦地にあったマルケルスが、退役兵を定住させた可能性が最も高い。だとするとそれは、数百人規模かそれ以下であろう。

「先住民」とは具体的に誰か。“ἐπιχωρίων ἄνδρες”なるストラボンの表現は、近隣の人々を想定させる。おそらく近隣の先住民居住地からの移住が認められたのであろう。つまりローマ的居住地コルドゥバは、その42ヘクタールという空間に少数のローマ市民と、多数の近隣から集められた先住民が居住していたと考えられる。

近隣先住民に移住が許されたのであれば、そこに先住民居住地コルドゥバの住民も含まれていたことを否定する理由はない。そして、彼らの移住はおそらく建設後も継続したのではないだろうか。なぜなら、前1世紀初頭までに、先住民居住地コルドゥバは遺棄されたからである。ローマ的居住地側による交易活動の規模拡大に従って、以前から交易に従事していた先住民居住地の住民も、新たな居住地をベースに活動する方が有利と判断したのか、それともその高い防衛力のためか、確たる理由は知る術がない。住民の大半がローマ居住地の方に移住したのであれば、それは二つの居住地の事実上の合併と言えるものであろう。そしてすでに述べたとおり、先住民居住地コルドゥバの人口はおそらく相当大きかった。

次にこの居住地への大規模な移住が知られているのは、アウグストゥス期のこととなる。

おわりに

イベリア半島に前2世紀初頭に二つの属州ヒスパニアが設置されて以降、ローマ帝国の属州統治体制は次第に確立する。それだけにイベリア半島の帝国への統合過程理解は、帝国形成史にとって重要な意味を持つ。換言すれば、半島各地の先住民諸集団が、属州設置後も長く続いたローマとの戦いの後、前2世紀末頃からアウグストゥス期にかけて、属州民という一つの人間集団へ統合されていく過程を理解することが重要である。

この過程は、伝統的に「ローマ化」なる概念で説明されてきた。この概念は、近年いくつもの点において批判にさらされているが、イベリア半島先住民の属州民への統合のあり方と度合いとを、全体として表現する語としては、「ローマ化」以上に有効なものはない。「ローマ化」なる語を用いつつ、ローマとイタリア周辺においてすでに定着していたモノや振舞いのうち、なにが、誰によって、どのように、どうやって、どの程度イベリア先住民の社会に持ち込まれ、定着し、彼らの文化的固有性とローマ的文化の差違を希薄にしていったのかを探る作業が、イベリア半島先住民の帝国への統合過程を理解する上で必要である。その第一歩として、半島統治の重要拠点であったコルドバの「ローマ化」を探り、半島の「ローマ化」研究に資するようにすることが有意義である。

ローマの居住地コルドバは、前2世紀中葉に建設された。しかしそのはるか以前から、先住民居住地コルドバが隣接地に存在していた。ローマの居住地コルドバの住民も、その建設段階以降、アウグストゥス期頃までおそらく大半が先住民、それも先住民居住地コルドバの元住民であった可能性が高い。そして彼らはその内部に多様な出自、文化的特徴を備えていた人々であった。この人々が、この時期のコルドバのローマ化において検討せねばならない主たる対象となることを結論として、コルドバのローマ化を検討するための予備作業としての本稿を終えたい。

〈註〉

1. イベリア半島の自然環境と石器時代までの概観、高校教科書とはいえ、サンチェス pp. 10-19 がコンパクトに整理されており有益。ローマ進出前の先住民の状況については、阪本 pp. 4-7. Richardson, pp.16~20. Curchin, Spain, pp.11~17. イベリア人への外来文化の影響については、Keay&Salas. ケルトイベリア概念の問題については、Romanization, pp.23~26. イベリア人とローマ進出前夜におけるカルタゴ勢力との関係については、Scullard, pp.17~43, Hoyos. pp.194~197. 宮崎「イベリア半島情勢」に詳しい。
2. この問題関心に関しては、南川、pp. 146 以下の論考に直接的・間接的に大きな教示を受けた。そこで用いられている「帝国の民」なる表現を本稿でもそのまま借用することをお許しいただきたい。
3. Curchin, Romanization, pp.8-12. Cf. 南川、p. 168.
4. App. Ib. 42~43.
5. App. Ib. 43. この時のグラックスとケルトイベリア人との戦い全体については、Liv. 40, 47~50. グラックスの条約については Richardson, pp.112-117 に詳しい議論がある。
6. Liv. 43, 2, 1~11. は、前 171 年に半島各地からの使者がローマを訪れ、元老院に対して「ローマ人の友にふさわしい扱い」を要求したことを伝える。

7. 第二次ポエニ戦争時におけるローマのイベリア半島進出から、前133年までの状況は宮崎「地中海」pp.30～66に詳しい。
8. Fear, pp.18 f ; pp.32 f ; p.41. Curchin, Spain, pp.48～52. Cf. Cornell, pp.158 f.
9. アウグストゥス期の北部におけるカンタブリア戦争については、Dio, 51, 20,5. Plut. Moral. 322 C ; また、Curchin, Spain, pp.52 f.
10. Plin. NH 3, 6, 17 ; 3, 18～30 ; 4, 113～118. しかし、元首政期にもはるかに多くの非特権都市が存在した。本村、pp.4～8.
11. 南川、pp.161-167.
12. この20年ほどの半島各地（特に南部に集中しているが）における考古学調査の進展はめざましい。ここでは、特に成果が集中しているバエティカの研究集成として、*The Archaeology of Early Roman Baetica*, ed. by Keay, S., Portsmouth, 1998（そのうち特に、Keayの論文）およびCruz- Andreotti, G. (ed.), *Roman Turdetania : Romanization, Identity and Socio-Cultural Interaction in the South of the Iberian Peninsula between the 4th and 1st Centuries BCE*, Leiden/Boston, 2018のみを挙げておく。
13. Strab. 3, 2, 15.
14. Strab. 3, 4, 20.
15. 南川、pp.165～167.
16. Keay, p.85. 桑山、pp.55-56.
17. Ventula, pp.91～95.
18. 桑山、pp.62～68. 桑山は、コルドバ、メリダ両都市の発展には属州統治政策に基づくアウグストゥスのイニシアティブがあったと考える。
19. Curchin, Romanization, p.9.
20. Curchin, Romanization, p.9 : “material and behavioural forms that were already current in, and disseminated by human agents from, less remote regions of the empire.”
21. Strab. 3, 2, 1.
22. Knapp, p.6.
23. Strab. 3, 1, 6 ; 3, 2, 4. Plin. NH 3, 7.
24. Knapp, p.7.
25. Strab. 3, 2, 11 ; 3, 2, 15.
26. Downs, pp.41～53. また Escacena et al. pp.30～33. は、フェニキア文化の影響が強い前8世紀以降については、トゥルデタニア固有の文化的特徴を都市遺構、遺物から確認することが困難であると。Cf. Keay et al. pp.87～96.
27. Escacena et al. pp.34～37. また Knapp, p.100, n.49 は、コルドバ出土碑文から、ギリシア系、ケルト系と考えられる名が読み取れると。
28. Ventula et al. pp.87 f.
29. Keay, p.84.
30. Keay, pp.59 f.
31. Ventula et al., pp.89 f. Knapp, p.6.
32. ストラボン、セヴィリアよりさらに上流のコルドバまでは大型船舶が航行できると述べる。このコルドバの位置が、交易ハブとしての重要性をもたらしたと考えられる。Strab. 3, 2, 3.

33. Magetti et al. p.199. Ventula, p.88.
34. Polyb. 35, 2, 2. Liv. 43, 15, 3. App. Ib. 48. 二つの年代をめぐる議論については、Knapp. pp.10 f.
35. App. Ib. 38 ; «πόλις, ἀπὸ τῆς Ἰταλίας Ἰταλικὴν ἐχάλεσε»
36. CIL II, 5041. Richardson, pp.117 f.
37. Liv. Per. 41. Festus, 86 (Lindsay). Richardson, p.113. Fear, p.39 ; 同 p. 64. は Illutugi がグラックスの建設を讃える碑文 CIL. II² 190. の内容を否定する。
38. Liv. 43, 3, 1~4. ローマ軍兵士と先住民女性の子孫 4000 人が元老院に出向き、自分たちの住む場所を懇請したと伝えられる。
39. App. Ib. 75. Diod. 33, 1, 4.
40. Liv. Per. 55.
41. Strab. 3, 2, 1.
42. Fear, pp.36 f.
43. Strab. loc. cit.
44. Ventula et al. p.88~90.
45. Ibid.
46. Ibid.
47. Ventula et al. p.88. Curchin, Spain, p.110. 特に Knapp, pp.10~12. これに対して、Fear, pp.214 f. は植民市であることを否定。Richardson, p.119 も。
48. Knapp, pp.12 f.

〈引用文献〉

- 桑山由文「アウグスタ=エメリタの創建とその影響—アウグストゥス帝期のイベリア半島南部」『西洋古代史研究』17 2017 pp. 55-71.
- 阪本浩「古代のイベリア半島」関哲行・立石博高・中塚次郎編『世界歴史大系 スペイン史1』山川出版社、2008 pp. 4-33.
- 南川高志「帝国の民となる、帝国に生きる」南川高志編『B.C.220年—帝国と世界史の誕生』山川出版社、2018 pp. 146-207.
- 宮崎麻子「変わりゆく地中海世界」南川高志編『B.C.220年—帝国と世界史の誕生』山川出版社、2018 pp. 22-83. (宮崎「地中海」と略)
- 同「第二次ポエニ戦争前夜のイベリア半島情勢：カルタゴ人とイベリア先住民」『フェニキア・カルタゴと地中海世界』1、インターパブリカ、2019 予定 (入稿済み) (宮崎「イベリア半島情勢」と略)
- 本村凌二「属州バエティカの都市化と土着民集落」『西洋古典学研究』30 1982 pp. 78-107.
- サンチェス、J. A., セバステイアン、M., アリモンテ、C., ガミル、J. p., コルベリーヤ、M., (立石博高監訳 竹下和亮、内村俊太、久木正雄訳)『スペインの歴史—スペイン高校歴史教科書』明石書店、2014 (サンチェスと略)
- Cornell, T., The End of Roman Imperial Expansion, in *War and Society in the Roman World*, ed. by Rich, J., et al., London/N.Y., 1993.
- Cruz- Andreotti, G. (ed.), *Roman Turdetania : Romanization, Identity and Socio-Cultural Interaction in the South of the Ibe-*

- rian Peninsula between the 4th and 1st Centuries BCE*, Leiden/Boston, 2018.
- Curchin, L. A., *Roman Spain : Conquest and Assimilation*, Oxford, 1991 (Curchin, *Spain* と略)
- Id., *The Romanization of Central Spain : Complexity Diversity and Change in Provincial Hinterland*, Oxford, 2002 (Curchin, *Romanization* と略).
- Downs, M., Turdetani and Baestetani : Cultural Identity in Iberian and Early Roman Baetica, in *The Archaeology of Early Roman Baetica*, ed. by Keay, S., Portsmouth, 1998. pp.39-54.
- Escacena, J. L. & Belén, Pre-Roman Turdetani, in *The Archaeology of Early Roman Baetica*, ed. by Keay, S., Portsmouth, 1998. pp.23-38.
- Fear, A. T., *Rome and Baetica : Urbanization in Southern Spain c. 50 BC-AD 150*, Oxford, 1996.
- Hoyos, D., *The Carthaginians*, Oxford, 2010.
- Keay, S., The Development of Towns in Early Roman Baetica, in *The Archaeology of Early Roman Baetica*, ed. by Keay, S., Portsmouth, 1998. pp.55~86.
- Keay, S. & Salas, A. R., The Ceramics : A Summary, in *Celti Penaflor : The Archaeology of a Hispano-Roman Town in Baetica*, eds. by Keay, S. et al., Oxford, 2000. pp.88-97.
- Knapp, R., *Roman Cordoba*, Berkley/Los Angeles, 1983.
- Magetti, M., Galetti, G., Schwander, H., Picon, M, Wessicken, R., Campanian Pottery : the Nature of the Black Coating, *Archaeometry* 23, 2, 1989. pp.199~207.
- Richardson, J.S., *Hispaniae : Spain and the Development of Roman Imperialism 218-82 B. C.*, Cambridge, 1986.
- Scullard, H. H., The Carthaginians in Spain, in *The Cambridge Ancient History*, 2nd ed. vol.8, ed. by Astin, A. E. et al., Cambridge, 1989. pp.17~43.
- Ventula, A, León, P., Márquez, C., Roman Cordoba in the Light of Recent Archaeological Research, in *The Archaeology of Early Roman Baetica*, ed. by Keay, S., Portsmouth, 1998. pp.87~108.

【Abstract】

The Origin and Romanization of the City of Cordoba

Asako MIYAZAKI*

This paper is a preliminary work discussing the “Romanization” of the Iberian Peninsula under the Roman Empire. The origin of the city Corduba (Cordoba), one of the most important centers of the Roman provinces of Hispaniae, is considered in this paper as a means of examining the “Romanization” of that city and possible driving force thereof. The results of this research suggest the majority of the population of Corduba was likely indigenous people comprising of diverse cultural groups. Further studies of Corduba, therefore, should be carried out based on the assumption that the indigenous peoples played a substantial roll in the “Romanization” of the city.

Key words : The Roman Empire, the Iberian Peninsula, Romanization, indigenous population, Cordoba (Corduba)

古代イベリア半島には、多様な先住民が生きていた。彼らの文化は、ローマ帝国の統治下でローマ文化に統合されたと考えられている。それは、彼らが固有の世界を捨て、ローマ帝国の民となったことを意味する。本稿はこの文化的統合が進んだプロセスを究明するための予備的な作業である。第一に、イベリア半島研究がローマ帝国形成過程の理解にとって、重要であることを示す。この半島に設置された属州ヒスパニアにおいて、ローマ帝国は帝国統治体制を確立したからである。第二に、文化的統合のプロセスを、「ローマ化」という表現で検討することの有用性を示す。次いで、ローマ化のケーススタディとして、半島南部の都市コルドバを取り上げることが適切であることを述べた上で、最後にコルドバの起源の概観から、この都市の住民の多くが先住民出自であったことを明らかにする。こうして、コルドバのローマ化を検討するにあたっては、先住民出自の人々の立場ならびに行動とその動機を検討する必要があることが明らかとなり、コルドバ研究の方向性が定まることになる。

キーワード：ローマ帝国、イベリア半島、先住民、ローマ化、コルドバ（コルドゥバ）

* A visiting research fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University